

詩とそば

阿部 公彦

文月悠光が相次いで詩集とエッセイ集を刊行した。路上での朗読から始めて、ラジオ、テレビ、ウェブと積極的に挑戦してきた詩人はさまざまな顔を持つが、19歳から5年にわたり書きためたという「恋にまつわる詩」を集成する『わたしたちの猫』（ナナロク社）は、その素直な透明さにもしろ底力を感じないから、／花びらを重ねて花の奥に潜めていた。／『強い人だね』と讃えられる度、／わたしはうれしげにそのほらを飾った。／何かの証、勲章のようだ。「（「ほらの花」）

甘んじていてきちんと居住まいを正した言葉は、自然体なのに「キメ」の構えが効いている。「まじげを上に向けてるのは／見上げていたい人がいるから。／呼吸している証として／頬にかすかな紅をさす。／うつくしさはいつも／確かな理由がひそんでいる。「（「たてがみのように」）。

ところがエッセイ集の『洗礼ダイアリー』（ポプラ社）では、そんな「キメ」がひっきり返されるのもおもしろい。描かれる

詩集に限らぬ武器痛感

のは徹底的に「平凡で垢抜けない私」。ここにはインフォーマルで不器用な詩人がいる。酔った友人もつまく介抱できず、男子との接触には過剰反応、自撮り写真はつい身構える。ただ、電車内でこっそり自撮りする中年男性に「人の自意識って愛おしいな」と妙な感興を抱いたり、ハグしてくる男性に「これって、されてる側だけじゃなくて、ほくの側も案外落ち着くものなんですよ」と言わせたりもする。詩人の武器は詩集だけではないと痛感。だからこそ、詩でなければならぬことは詩にするのだ。

今季も力作の詩集が多かったが、天逝した矢沢幸（一九四四～六六）の『矢沢幸詩集』（思潮社）は、繊細で複雑な現代詩集に囲まれて、感情の明瞭さが際だった。「おれの中に／もう一人／すばらしい／人間がいて……／そいつと／しっかりと／手をむすんで／生きて／行きたい」（「おれの」）。恨むでも力むでも飾るでもなく、それでいて／詩／に達する——本当の才能が必要になるのはそこか。「私はいつも思う。／石油のように／清んで美しい小便がしたい。／しかも火をつければ／燃えるような力を持った／小便がしたい」と。「（「私はいつも思う」）

（東大准教授）